



和泉式部日記構想論序説 : 帥宮の心中思惟記述をめぐって

片山, 剛

(Citation)

国文学研究ノート, 14:19-29

(Issue Date)

1981-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81012226>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012226>



和泉式部日記構想論序説

——帥宮の心中思惟記述をめぐって——

片山 剛

和泉式部日記の研究は、自作か他作かという作者の問題をひとつの核としてすすめられてきたといつても大過あるまい。それはなにも作品の文学史的定位ばかりに関心が集まったことを示すものではないけれども、というのは、作者を決定するに足る外部徴証が存在しない以上、諸本系統、素材、構想、文章、語法などから帰納的に作者を推定する以外に方法がなく、必然的に作品論的考察が求められてきたからである。

その中で、構想論的な観点からは、女の視野に入りえない帥宮（およびその周辺の人たち）の言動を経験的に描写する点が重要な課題となっている。従来は、作者を和泉式部と仮定した場合、この描写が可能か否か、またいかにして可能かなどが議論されてきた（鈴木一雄氏『全講和泉式部日記』解説参照）。そこで次に問われるべきは、それが持つ作品構想上の積極的意義であろう。

本稿はその一環として、事象として表面にあらわれないため、主人公（以下「女」という）がもっとも知り難いはずの帥宮の心中思惟に関する記述（以下「心中思惟記述」という）に着目

して、その意義を考えようとするものである。

本文引用は新訂版岩波文庫本（昭和五六年刊・清水文雄氏校注）により、（ ）内に該当ページを記す。

（一） 女の心中思惟記述との比較の中で

和泉式部日記は、女と帥宮の邂逅から女が帥宮邸に（おそらく召人としての扱いで）入り、宮の北の方が退去するまでの「忍びの恋」をつづったものである。

その恋愛関係の形成過程を描くために、作者は単一視点によらない新しい方法を導入した。すなわち女からの一方通行ではなく、帥宮の側にも作品世界を見渡す機能を与えようとしたのである。それはおそらく和泉式部日記の作品世界を女と帥宮の二人の共通世界に定めるためであった。

しかしながら両者の描写は質的、量的に対等におこなわれているものではない。まずその不均衡の内容を確認しておこう。当然ここでは今回のテーマである心中思惟記述を組上にのせて

いささかの分析を加えることになる。

女の心中思惟記述の特徴のひとつは、屈折した心の複雑な動きや自省の内容が詳述されることである。たとえば、

(ア)いと便なき心地すれど、「なし」と聞えさすべきにもあらず。昼も御かへり聞えさせつれば、ありながら帰したてまつらんもなさげなかるべし、ものばかり聞えん、と思ひて

(一五〇一六)

(イ)一の宮のことも聞えきりであるを、さりとて『山のおなたに』しるべする人もなきを、かくて過ぐすも明けぬ夜の心地のみすれば、はかなきたはぶれごとといふ人あまたありしかば、あやしきさまにぞいふべかめる、さりとて、ことさまの頼もしき方もなし、なにかは、さてもこころみんかし、北の方はおはすれど、たゞ御方々にてのみこそ、よろづのことはたゞ御乳母のみこそすなれ、顕証にて出でひろめかばこそはあらめ、さるべき隠れならんには、なでふことかあらん、この濡れ衣はさりともし着やみなん、と思ひて

(六二一六三)

などがある。(ア)は帥宮の最初の来訪に際しての、(イ)は帥宮が女に邸に入るよう勧めたときのものである。いずれも瞬時的な思惟ではなく、心の動きを流れのままに捕えたものである。それは単に長さの問題ではない。ひとつのことがらに對してさまざまな角度からの感想を述べていることが重要なのである。また特に(イ)に見える「さりとて」「なにかは」「かし」に注目しておきたい。「さりとて」は二箇所に見えるが、逆接を示し、容

易には定まらぬ心を垣間見させる。「なにかは」は感動詞(岩波古語辞典)で、「なあにかまうものか」と自己を扇動しているのとれる。また「かし」は念を押すときの語で、決心のほどを再確認する体である。理性と感情の渦中を漂いながら自己の考えを反芻しつつ、決意を導こうとしている女の複雑な心の動きが伺えるだろう。また、

(ウ)あやしかりける身のありさまかな、故宮のさばかりのたまはせしものを、とかなしくて、思ひ乱る、 (一八)

(エ)さも見苦しきわざかなと思ふ (三二)

(オ)たゞに候ふも、なほもの思ひ絶ゆまじき身かな、と思ふ (一〇五)

などは自己の行動や状態を省みたものであり、いかにも女の心情に密着した位置から捕えられたものと言えよう。三者ながらに「かな」という詠嘆の助詞が用いられているものも自省の性格とよく見合ったものである。

以上の二点に関する帥宮の心中思惟記述はどうだろう。

まず前者の如き複雑な心理の動きを描いた部分であるが、これはほとんど見出だすことができない。ただひとつ次の例が挙げられようか。

(カ)あやしうすげなきものにこそあれ、さるは、いとくちをしうなどはあらぬ物にこそあれ、呼びてやおきたらまし、とおぼせど、さてもまして聞きにくゝぞあらん、とおぼしみる、 (二九一三〇)

しかしこの例は特殊なものと思なすことが可能である。その

理由を簡単に述べる。

五月のある日、帥宮は女の家を訪れようと準備している。すると侍従の乳母があらわれ、軽々しい忍び歩きをひかえるように諫める。そこで帥宮は「いづちかいかん。つれづれなれば、はかなきすぎごとするにこそあれ。ことごとくしう人はいふべきにもあらず」と言ったあと(カ)のように考えるのである。

ところで、この場面は日記全体の中でもたいへん特徴的な書き方がおこなわれている。すなわち帥宮側のできごとを記述するに於いては詳細にすぎるのである。たとえば、乳母が帥宮の前にあらわれたのが「薰物などせさせ給ふ」時であった、という細かい点にまで筆が及んでおり、また乳母の諫言は例外的に長く(岩波文庫で十一行にわたっている)かつ多彩な内容(女のありさま、故宮や右近尉のことなど)を含んでいる。さらに(カ)は直前の乳母のことは、

(*)使はせ給はんとおぼしめさん限りは、召してこそ使はせ給はめ
(二八・二九)

(ク)そが中にも、人々あまた来通ふ所なり
(二九)

と類似内容を持ち、心中思惟記述としての自立性が希薄である(このことについては後述する)。このように考えると、(カ)の内容の詳細さは心中思惟記述の特質以上に場面の特異性に還元できるのではなからうか。なお、木村正中氏は「和泉式部日記の特質」(『日本文学』昭38・2)において、(カ)の中の「さてもまして聞きにくゝぞあらん」の一節は「式部の側から出てくる言葉」であったと言われている。

一方、自省の箇所を指摘することも困難と言わざるを得ない。ただ次の一例のみは女に対する中途半端な態度を悔いたものを見ることができる。

(ク)あはれにもののおぼさるゝまゝに、おろかに過ぎにし方さへくやしうおぼさるゝ
(七八)

「四十五日の忌だがへ」のために「御いとこの三位の家」に移った帥宮は女を強引にそこに連れ出す。そして「よろづの事をたまはせ契り、(ク)のように考えるのである。しかし右に述べた状況からわかるように、この場合女は遠くから帥宮の心情を推測しているのではなく、まのあたりに感じているのである。あるいはこの一節は帥宮が直接女に語ったことばを心中思惟のかたちであらわしたのかも知れない。また、(ク)は「おぼさるゝ」で文が切れるのではなく、「おぼさるゝも、あながちなり」と続いており、女の心情に直結しているのである。これは推測だが、このとき帥宮が語った「よろづの事」の中で、これまでの態度を後悔している、ということが女にもっとも強烈な印象を与えたのではなかったか。そしてその際に胸をよぎった「あながちなり」という感想がくっきりとした残像をとどめたためにこの記述がおこなわれたのではなからうか。ここで作者が示したかったものは帥宮の心そのものではなく、「あながちなり」という批判のことばであったにちがいない。もちろん(ク)を自省と認めたところで、女の自省としては質量ともに比較にならない。

以上のことをまとめると次のように言えるだろう。

女の心中思惟記述が多角的、重層的であるのに対して、帥宮のそれは単一的、平面的と言える。換言すると、前者は動的、後者は静的にあらわされているのである。

ここまでは具体的に女と帥宮の心中思惟を記した部分と比較してきたが、もうひとつ興味ある語の用法を調べておきたい。

それは一般に自発の助動詞と呼ばれている「る」「らるる」である。文法書では受身、可能、尊敬、自発の意味で用いられると説明されているが、その中で「動作・作用・状態の自然展開的・無作為的な成立を示す」(『岩波古語辞典』)「基本助動詞解説」)ものが「自発」と言われている。現代語に直すと「ついで……してしまう」「おもわず……する」というほどの意味である。「無作為的」に成立する動作とは、言いかえると没意識的なものであり、その動作が起こるのは周冊の人の目には唐突であったり理に叶わなかったりするだろう。そこにあるものは人間の心理の微妙な揺れであり、その揺曳が意志を越えて動作をおこなわしめるところに自発の意義が見出させるのである。とすると、表面的には心中思惟記述と言いつけるものではないけれども、自発の意味で用いられた「る」「らるる」は、ある動作の背後にその動作を誘発する心的契機が潜在することを示していると言ってもよいだろう。

ひとつ例を挙げてみよう。日記冒頭部近くの用例である。

「久しく見え」なかった「故宮に候ひし小舎人童」が女を訪れる。近況などをいくらか話したあと、童は帥宮から託された橘の花をとり出す。すると女は、「昔の人の」と「いはれ」

たという。

さつきまつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

(古今集・夏・よみ人しらす)

の第四句を思わずささんだのである。ここに「れ」(基本形は「る」)が見えている。いうまでもなく女は帥宮の問いかけに対して単に古今集歌の知識によって理性的に反応したのではない。帥宮が故宮を偲ぶ気持を推察しただけでもない。ここには、ことさらめいた同情の入る余地は全くないといってよい。女は他者とのかわりを断ち切った次元で橘の花に故宮の影を見て取ったのである。そしてこの連想が直感的であればこそ女の故宮に対する思いの強さがうかがい知れるであろう。「れ」一語によってそういった瞬間的にかすかな心の動きが伝えられている。以上のように考えると、「る」「らるる」の用法と心中思惟記述とはあながち無縁だとはいえなくなってくる。

和泉式部日記に「る」「らるる」は四九回用いられているが、そのうち自発の意味をもつものは、筆者の検索によると十七例である。次にそれを列挙し、その性質を調べてみる。なおへ▽内に動作の主体および会話、歌、文(ふみ手紙)、地の文の区別を記しておく。

(一)いとたよりなくつれくりに思ひたまうらるればへ小舎人童・
会話▽ (一一)〜(一二)

(二)「昔の人の」といはれてへ女・地▽ (一三)

(三)これも心遣ひせられてへ女・地▽ (一六)

(四)ふれば世のいとさうさのみ知らるゝにへ女・歌▽ (二六)

(七)あけほのの御姿のなべてならずみえつるも、思ひ出でられ
てへ女・地

(三一)

(八)人や見けん、と思ひ出でらるゝほどなりければへ女・地

(三四)

(九)「うらやましくも」などがめらるればへ女・地

(三七)

(十)思ひ知られぬあやしかりしもへ女・歌

(四四)

(十一)惜しまるゝ涙に影はとまらなむへ女・歌

(五七)

(十二)うちながめられてへ女・地

(七〇)

(十三)わりなくこそ思ひたまうらるれへ女・文

(七二)

(十四)なごり恋しう思ひ出でられてへ女・地

(八五)

(十五)君により又惜しまるゝかなへ女・歌

(八八)

(十六)いとものあはれにてうち泣かれぬへ女・地

(九一)

(十七)歎きのみせらるへ女・地

(九四)

(十八)「あなものをぐるほし」といはれてへ女・地

(九四)

(十九)つれづれなりし古里まづ思ひいでらるへ女・地

(一〇二)

一見してわかるように、動作の主体は(十)を除くとすべて女である。しかし(四)が会話文中のものであることは注意されねばならない。素材を直接引用するかたちをとる会話、歌、文(ふみ)の内容や文体は原則的に作者の筆が支配する世界ではなく、それぞれの話し手(書き手)の意志や個性によって決まるのである。それゆえに当面問題にしている作者の方法としての心中思惟記述とは次元を異にするといわざるを得ない。とすると、作

者の支配下にある地の文に用いられているのは(十)(十一)(十二)(十三)(十四)(十五)(十六)(十七)(十八)(十九)の十一箇所となり、動作の主体はすべて女である。当然ながら帥宮を主体とする動作には一切用いられておらず、両者の間にはそれなりの懸隔を認めなければならない。すなわち「る」「らるる」が「瞬間的にかすかな心の動き」を伝えるものであるなら、この語に関する限り作者は帥宮の心中思惟を女ほど微細には記述し得なかったと認められるだろう。

すでに述べたように和泉式部日記には女の視野外における帥宮の言動が直接経験のかたちで記されている。しかしこの助動詞の用法ひとつをとってみても、それは表面的描写にすぎず、帥宮の心深くまで捕えたものではないことがわかる。帥宮の動作は「自然展開的・無作爲的な成立」としては、いいかえると微妙な心理の揺曳が導くものとしては把握されていないのである。

以上、表面にあらわれた心中思惟記述と覆面の下のものとのふたつの観点から調べてみた。いずれの結果からも帥宮の心中思惟記述が心の動きに添って捕えられたものではないことが確認される。

女との比較の中でいくらかでもその実像が呼びあがったであらう。

(二) 作品形成の方法として

では次に帥宮の心中思惟記述の積極的意義を作品形成の方法

の中にさぐってみたい。

すでに少し触れたのだが、帥宮の心中思惟記述はかならずしも帥宮の主観によって再構成されていると考えたのではないか。むしろ女の主観によって再構成されていると考える方が自然ではあるまいか。さきほどは「自立性が希薄」という表現を用いたが、それについてさらに詳しく検討しておく。

まず女の心情や立場が帥宮の心中思惟記述に投影しているとみられる例を挙げよう。

(あ) 思ひがけぬほどに忍びて、とおぼして (一五)

これははじめての訪問に際しての帥宮の心で、「女が思ひもかけないときに忍んで行こうとお思いになつて」の意である。ところでその直前に帥宮は次のような文を贈っている。

(い) 語らば慰むこともありやせんいふかひなくは思はざらん
なん

あはれなる御物語聞えさせに、暮にはいかゞ (一五)
これによると帥宮はその日の「暮」に訪れる旨を予告していることになる。そして帥宮は実際「昼より御心まうけして」「あやしき御車にておはしま」したのである。そのときの時刻は次のような理由からも「暮」であつたと思われる。

女は帥宮を「西の妻戸」に入れて話をするのだが、そこに「物など聞ゆるほどに、月さし出でぬ」とある。これによると帥宮の訪問は月の出る前であつた。前後関係から、また「いと明かし」といわれる月の明るさから判断すると、この日は四月二十日ごろであつた。いわゆる有明の月のころであるから月の

出は午後十時前後であつたと想定できる。それゆえに帥宮の訪問は「暮」(ないしは宵)であつたらう。むろん男が訪れる常識的な時刻はこのころであり、和泉式部日記の中でも十月の帥宮訪問のさい、「昼などはまだ御覽せねば」と書かれている。

とすると、この訪れは予告どおりのことであり、帥宮がそれをあえて「思ひがけぬほど」と考えるのは不自然である。では逆に女の立場から捕えるところだろう。「暮にはいかゞ」の文に対して女は次のように返事している。

(か) 慰むと聞けばかたらまほしけれど身のうきことぞいふか
ひもなき

「生ひたる蘆」にて、かひなくや (一五)
形式上訪問を拒否しており、ごく常套的な贈答である。そし

て女はこれらの贈答を「つれ」をなぐさめるための「はかなきこと」と考えており、さきの予告をうのみにするほどの浮き立った心理はもちあわせていない。帥宮が訪れたとき意外なあまり「いと便なき心地」がしたといっているところからもそれは明らかであろう。女にとって帥宮の訪問は文字通り「思ひがけぬ」ことであつた。帥宮がそこまで深く女の心を見抜いていたのだとする向きがあるなら、それはうがちすぎといわざるをえない。女が「思ひがけ」なかつたのは事実であらうし、その気持ちを知り得たのはひとり女自身であつたにちがいない。

このように考えたとき、形式上は帥宮の心中思惟である(あ)には女の心情が溶け込んでいると思えるのである。

つきに心中思惟記述相互のあいだに何らかの影響の見られる

例を挙げてみる。

いわゆる「手枕の袖」の部分（十月の記事）で帥宮は女を

「愛すべき人」として再発見するのだが、ここでの心中思惟記述は特徴的である。

(A)人の便なげにのみいふを、あやしきわざかな、こゝにかくてあるよ、などおぼす (五九)

(B)頼もしき人もなきなめりかし、と心苦しくおぼして (六〇)

(C)世に馴れたる人にはあらず、たゞいとものはかなげに見ゆるも、いと心苦しくおぼされて (六一)

これらは位置的にかなり近いにもかかわらず、内容に共通点が見出させる。まず(A)は「十月十日ほどに」女を訪れ、「思ひ乱るゝ」女の様子を見たときのもの。世人が男性関係について女をけしからぬ者のように言っていることを否定する気持ちである。(B)はその翌朝の心情である。女には頼っていける男がないことを感じ取って、いっそういとしく思うようになったという。(C)はさらに数日後に女を訪れたときのこと。帥宮はしだいに女の真の姿を見出だすようになり、男女関係のことに馴れてなどいない頼りなげな人だと感じている。

このように右の三つの例文はすべて、かつてうわさに聞いていた女の浮き名を自らの体験によって打ち消していくという共通内容をもっている。また(B)(C)の二者とそのあいだにみえる、(D)心苦しとおぼされて (六一)

の三箇所には女に対する気持ちとして「心苦し」がひとしく用

いられている。

作者はこのように同趣向のことをくりかえし書くことをいとわない。ではそのことには何か必然性があるのだろうか。右に述べたくりかえしの内容が強調されなければならない理由があるのだろうか。作品構想における意図が潜んでいるのではないだろうか。

ここで視点を改めて帥宮の女に対する感情の推移を調べるところにする。(なお山岸徳平氏は和泉式部日記他作説の根拠のひとつとして以下のようなことを挙げておられるへ日本古典全書『和泉式部日記』解説一二〇〜一二一ページ)。すなわち、女の「好色な私行に対する評判や辛辣な非難めいた叙述が客観的に記されてゐる」が、「和泉自身の記述とすると甚だ不可解」だとされるのである。次に述べることはおのずからこの山岸氏説への反論をなすものであろう。

女に対する帥宮の感情を記す最初のもは四月下旬の、(E)げにいとほしうもおぼせど (一九)

である。しかしこれは直接女に向けられたというよりむしろ直前の女の歌、

待たましもかばかりこそはあらましか思ひもかけぬ今日の夕ぐれ

に対する感情とみるべきである。じつはこの時点においてすでに帥宮の心には、

(F)夜ごとに出でんもあやしとおぼしめすべし、故宮のはまでそしられさせ給ひしも、これによりてぞかし、とおぼし

つゝむ

(一九)

のような警戒心がひそんでいたのである。そしてこの警戒心は次のような女への疑惑へとつながっていく。

(c)人のあるにやとおぼしめして

(二三)

(a)車侍り、人の来たりけるにこそ、とおぼしめす

(三五)

(i)むつかしけれど、さすがに絶えはてんとはおぼさざりければ

(三五)

(j)一夜のことをなま心うくおぼされて

(三六)

(k)いとあはしうおぼされて

(四〇)

(e)人やあるらん、とおぼせど

(五〇)

では作者はなぜ女にとって不利な記述をはばからなかったのであろうか。女すなわち和泉式部はそれだけでなくとも男性関係を取り沙汰されていたはずである。

この疑念に対して見落としてはならないことがある。それは、右に挙げた六つの疑惑がすべて根拠のないものであると読者に知らされていることである。

まず(e)から見えていこう。これは帥宮に仕える人々(女房たちであろう)が「このごろは源少将なんいますなる。昼もいますなり」「治部卿もおはすなるは」と、女の醜聞を帥宮に告げたときのものである。相手の男の名前(姓や官職名で呼んでいるが、これは固有名詞と同然である)を聞かされては帥宮も「あはしう」思つて当然だろう。しかしこのことについてはほかの部分に何ら記述があるわけではなく(源少将、治部卿の名はここにしかみえない)、しよせん口さがない女房たちのうわ

さ話にすぎないのである。彼女たちの口の悪さは結末部近くにも記されており、そこでは「にくみあへる」(にくまれ口をたく)という表現がなされているほどである。つまり(e)は帥宮が現場を目撃するなどの体験を通して得た疑惑ではないのである。

それに対して残る五例はすべて帥宮の体験にもとづく疑惑といえる。ところがそれぞれの前後を見ると、いずれも帥宮の誤解や女の不手際によるものであることがはっきり記されているのである。

(c)は五月のはじめ、帥宮が女を訪れて案内を乞おうと門をたたかせたときのことである。応対の人があらわれず、とうとう逢うことができなかつた。そこで「誰か男が来ているのではなか」と勘ぐつたのである。しかし直前を見ると、

(i)女、さしもやはと思ふうちに、日ごろの行なひに困じてう
ちまどろみたるほどに (二三)

とある。みだらなことをしていたどころか、仏道精進の疲れのために門をたたき音が聞こえなかつたというのである。

(k)(j)の三例は六月ごろのこと、女の家の前に車があるのを見つけて通り男がいるのだと邪推したものである。そしてやはり直前に、

(b)人々方々に住む所なりければ、そなたに來たりける人の車
を (三五)

と記されている。この車は同居している女性(姉妹をさすのであろうか)のところに來たものだと予めことわつていたのであ

る。

(e)は九月有明の月のころ、月をながめながらふと思ったもので、いわば帥宮の勝手な想像なのだが、じつはこの直後に女を訪れながらも逢えなかったことが記されているのである。しかしそこでも子細が次のように語られている。

(㉑)あやし、誰ならん、と思ひて、前なる人を起して問はせんとすれど、とみにも起きず。からうじて起しても、こゝかしこの物にあたり騒ぐほどに、たゞきやみぬ

(五〇と五一)

女は来訪に気付いているが、侍女や下男たちの不手際で帥宮を入れることができなかったのである。

以上のように考えると、帥宮の体験にもとづく疑惑とは言い条、事実無根のものでしかないことが明らかにされていることになる。そして理屈の上ではもともと客観的信頼度が高い帥宮の体験を否定することは、それだけ強く女の潔白を証明することになるのではないか。

なお、この日記の中には別のかたちではかの男性との關係に触れているものがある。しかしそれらとて女の浮気沙汰を肯定するものではない。

五月雨のころには「すぎごとする人々」がいるものの「たゞ今はともかくも思はぬ」と言っており、七夕の日には「すぎごとどもする人のもと」から恋歌が届くが、「目も立たず」とはねつけている。また十月には「文おこせ、又みづからもたちさまよふ」人もいるが、それは「よからぬ人々」の勝手なふるま

いであって、女はいっさい受けいれてはいない。

このように作者は女の醜聞を頭から否定したりはしない。それが女のあずかり知らないところから生ずるうわさや誤解にすぎないことを徹頭徹尾述べようとしているのである。そして作者はこの主張をより明確に伝えるために帥宮の心中思惟を借りたのではなからうか。

ところで、女の醜聞を打ち消すことはただそれだけの目的のためにおこなわれたのではなかっただろう。浮名の否定の上帥宮の女に対する絶対的信頼が加わってはじめて二人の關係が確固たるものとして成立し、同時に和泉式部日記の作品世界が屹立したのであるから。ここで我々はあらためて「手枕の袖」に目を向けなければならない。「手枕の袖」は十月中の記事で、二人が合計八首の歌にこの一句を詠み込んだ一連の場面をさし去ったものである。岩波文庫では五八と六九ページにあたる。いったい帥宮の心中思惟記述は「手枕の袖」以前は女に対する疑惑やためらいに関するものが圧倒的である。このことは充分注意されるべきであろう。かかる前提があればこそクライマックスとしての「手枕の袖」において女と帥宮の心の調和が成就するからである。そして「手枕の袖」にみえる心中思惟記述のはほとんどは帥宮の女に対する新たな認識と評価、および絶対的信頼を内容としている。たとえば、

(㉒)あはれにおぼされて

(五九)

(㉓)をかしとおぼして

(六〇)

(㉔)心苦しとおぼされて

(六一)

などが簡単な例として挙げられよう。とくに(乙)にみえる「をかし」はこれ以前に九例みえるのだが、それはすべて女の心情によるものなのである。そしてこのあとは、帥宮の心情として

(丙)なまきけなからずをかし、とおぼす

(七二)

(四)をかしとおぼして
のように散見する。

(九〇)

前半部では女の素行を疑うところにウエイトがおかれていた。

その疑心は「手枕の袖」において女と近く語らい、そのはかなげな様子を凝視することによって氷解する。ここに至って帥宮はすべてがとるにたりない風聞にすぎなかったことを身をもって感じ取ったのである。とすると、女の浮名にまつわる記述は最終的には決して女をおとしめる性質のものにはならないであろう。疑いが強ければ強いほど真実を知ったときの確信は不動のものに近くなる。物理的なリアクションのはたらきにも似た、この「逆転の機能」が「手枕の袖」をクライマックスたらしめるのにきわめて重大な役割を果たしているのである。「心苦し」という語がくりかえし用いられたり、女の孤独を強調するような帥宮の心中思惟が書かれたりする理由もこんなところにあつたのではないだろうか。

なお、読者が女の潔白を知るのは「手枕の袖」においてはじめてなされることではなかった。帥宮の心に疑惑が起ころつど、女と読者はそれが事実無根であることを承知していたのである。そこにひとり疑惑を抱きつけてきた帥宮がくみすることによって、女の潔白の証明はこの作品において完全なものとなつた

といえるのである。そしてそのことは、さまざまな悪条件にうち克つた彼ら二人だけの共通世界の確立にも通じているのであろう。さればこそ帥宮の心中思惟記述は和泉式部日記の場面展開の中できわめて重大な位置を占めているといえるのである。

(三) 結び

和泉式部日記にみえる心中思惟に関する記述はいくつかの特徴を孕んでいる。

まず、女の心中思惟には細かく詳しい内容に立ち入った記述が目立つ反面、帥宮のものは瞬時的な捕え方がなされている。本稿ではその点を具体的な記述と自発の助動詞「る」「らる」の用法の両面から考えてみた。

また帥宮の心中思惟記述は女の心情の影響の下で再構成ないしは任意に形成されたふしがある。とすると、ここには客観的に心中思惟を捕えて記していこうとする態度はなく、作品構想上の何らかの作為が加わっていると考えられるのである。その例としては女の男性関係にまつわる帥宮の疑惑をとりあげてみた。帥宮が疑惑を抱く原因となつたできごとはずべて誤解にすぎないものであつた旨が前後の部分に記されている。すなわち作者は女の醜聞を頭から否定して筆を用いないのではなく、ひとつひとつ確かめるように打ち消していったのである。そして帥宮は「手枕の袖」の場面を転換点として女を全面的に信ずるようになり、「手枕の袖」はおのずからひとつのクライマックス

スを形成しているのである。

つねに悪条件にさらされて「もの思ひ絶ゆまじき身」に終始しながらも、魂を傾けて築きあげていったガラスのごとき充足の世界——作者はひたすらそれを書きつづけた。そういった構想に合致するように、帥宮の心中思惟記述は場面展開の中で大切な役割を果たしているといえるのである。

いったい日記文学の読者は作中登場人物の中では一貫して主人公（＝作者）にもっとも近い位置から作品内の状況を見るのが自然な姿である。いいかえると、読者にとって主人公（＝作者）は一人称的な存在なのである。作品を正しく理解するという観点からすると、これは日記文学の作者と読者の健全な関係であるにちがいない。しかし避けがたい問題としてここにはひとつ副作用が生じるのである。すなわち、読者が主人公（＝作者）に寄り添っていればこそ作者が作品内のできごとを百パーセントの客観性をもつものとして提示することは不可能に近いのである。それゆえに日記文学の性質を維持しながら客観性の強い記述をするためには、何らかの新機軸を用いる必要があるだろう。

そこでひるがえって和泉式部日記について考えると、次のようなことがいえるのではなからうか。

作者（＝女と考えてよいだろう）は、女の主観で捕えたことがらや女が実際に接することのできた範囲での事実を、帥宮の心中思惟という女に律することのできるはずのない次元で確かめ、保証しようとした。これは明らかに作品構想上の手段とい

えるだろう。そしてそれが和泉式部日記特有の二人だけの共通世界を構築していくための新しい方法であった。

（かたやま ごと）